

# 花ちゃん・オー君・モンタ博士のわくわくドキドキ国立てくてく

国立第七小学校 平成25年11月27日 NO.62

オー君 「花ちゃん。葉っぱが色づくって本当に不思議（ふしぎ）だね。春から夏にはあんなに緑色だった葉っぱがどうして、黄色や赤の葉っぱになっちゃうんだ。」

花ちゃん 「本当にそうね。あの緑色はどこに行っちゃったのかしらね。」

**ということで、二人で図書室に行って、いろいろと調べたみたさ…**

オー君 「なにになに。葉っぱの中にはクロロフィル？という葉緑素（ようりょくそ）？という緑色のもとのようなものがあるので・・・、緑色であるが・・・何だ？クロロフィルじゃなかった・・・。フィルがヨウリョクチョ？・・・何だ！こりゃ？」

花ちゃん 「その葉緑素がこわれて、アントシアン？とよばれる赤い色のもとができて葉っぱが赤くなる・・・？？？。何だ？これ？アントシアアア、アン？あれ、べろをかんじゃいそうだわ。これは、ひょっとしてもしかして、宇宙人語（うちゅうじんご）かしら？」

オー君 「なにになに。黄色に変（か）わる葉っぱは、アントシアンではなくて・・・、カロチノイド？という黄色のもとが、出てくる・・・？何だ？こりゃ？カのノドがどうしたって。」

花ちゃん 「緑色のもとである葉緑素が消（き）えるようになると、カロチノイドがうきでてきて、黄色になる・・・？なんだかむずかしいわ。チンプンカンプンのわからんちんですね。」

オー君 「おいらもギブアップだ。こんな時はモンタ博士に助けてもらおう。」

モンタ博士 「さっきから苦労（くろう）しているみたいだね。小学生には難（むずか）しすぎるかな。それじゃ、ここで考えてみよう。秋の季節（きせつ）だけしか、紅葉（こうよう）はみられないかな。」

オー君 「そう言えば、おいら夏でも赤い葉っぱをみたことあるよ。台風（たいふう）の後とか、虫に食われた葉っぱとか赤くなっていたな。」

モンタ博士「そうなんだ。葉っぱがいたんで、水分（すいぶん）や養分（ようぶん）などの流（なが）れがとまってしまう時、紅葉（こうよう）はおこるんだよ。」

花ちゃん「それじゃ、どうして秋になると、その流れが止まるのですか。モンタ博士。」

モンタ博士「冬が近づくと、根（ね）っこが水をすいあげようとしなくなるし、それに、葉っぱをつけておくと、葉っぱから水分がどんどんじょうはつするだろう。それで、木は自分のいのちを守（まも）るために、葉っぱを落（お）とすのさ。紅葉は、葉っぱを落とすまえに、葉っぱにある養分（ようぶん）が変化（へんか）したものだと言ったら、分かってくれるかな。」

花ちゃん「ふーむ。分（わ）かったような・・・、分かんないような・・・。」

オー君「うーむ。分かんないような・・・、分かんないような・・・。」

**そこへ、モンタ博士の奥さんがぶらりと歩いてきて、一言、言ったとさ…。**

モンタ博士の奥さん「何を難（むずか）しいお話をしているの。小学生には難しすぎるわよ。

そんなことより、きれいに色づいたモミジをいっしょに見に行きましょう。

どうして？と考える事もとっても大切な事だけど、きれいな紅葉を見て、すばらしい！うわーステキ！と感動することも大切ではないかしらね。」

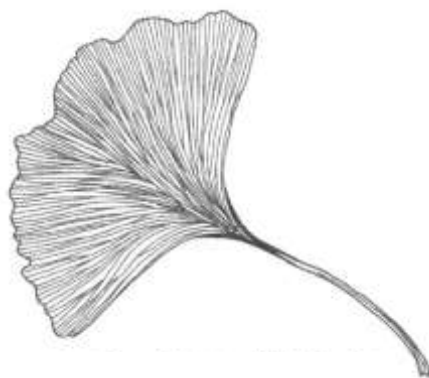
モンタ博士「まったく、その通りでございます。奥さま。」

モンタ博士の奥さん「花ちゃん、オー君。下にカエデとイチョウの絵があるでしょう。それに

きれいに色鉛筆で色をぬりましょうよ。さあ！自分の見た色でていねいにぬって楽しみましょう。」 **まったく、その通り、いつも奥さまには頭があらうないモンタ博士だったとさ…。**



**カエデ**



**イチョウ**

**もみじ映える国…日本** ふつう、秋に野山の植物（主に樹木）の葉が紅色、黄色、黄褐色、紅褐色などに変わることをもみじとよぶ。日本は世界でも珍しいほど、素晴らしい美しいもみじの風景が見られる国である。その理由としては、もみじの主体は落葉広葉樹林だが、それらが多く生育する温帯地域が日本列島の広い範囲をしめているからである。また、もみじになる植物の種類が豊富なこと。さらに地形の景観も変化が多く、そこに繁茂する植物の多様性が高いからでもある。